

座 談 会

「教養を高める」をめぐるって

出席者 岡 部 政 裕 (静岡大学教授)

三 枝 康 高 (静岡大学助教授)

司会 編集部

<“教養を高める”をめぐるって>

5月、静岡で、日本看護協会総会が開かれた。取材のため総会に出席した編集部、この記念に何かすばらしい企画をと考えた結果、静岡大学の先生にお願いして、看護教育の問題点となっている「教養」についての座談会を考えついたのだ。しかし、当日、「協会代表を国会に送ろう」という議題をめぐるって、討論が展開され、ひきつづき看護連盟の総会が行なわれ、夜の8時すぎまで会議が延長するに至った。

やむなく、看護婦さんの出席を待たないで、岡部、三枝先生に、編集部が「教養」についてのお話を伺うはめに立ち至った。

しかし、内容は、両先生のお力によって問題の核心にふれることができた。看護学校の教育にどう一般教養を持ち込んだらよいか。考えさせられるところ大と信ずる。

司会 技術を中心とした学校における一般教育ないしは一般教養の問題についてお話いただきたいと存じます。どうしてこの問題を取り上げたかと申しますと、現在高等看護学院のカリキュラムを見ますとほとんど技術的な内容でつまっているようでございます。最近になって、看護婦の人的レベルあるいは、社会性の有無などの問題が、自分達の中からの反省として出てきておりまして、看護のレベルを上げるためには、テクニックのレベルを上げるだけでなく、人間そのものの教養を上げていかなければならないといわれて来ております。

それは勿論、看護婦の社会的地位を上げていこうとすることにつながる問題だと思われます。それら一切に関連して、看護教育における一般教育をどう考えるか、また一般教養科目をどれだけ盛り込んでいくかということ、現在カリキュラム委員会でも研究していると聞いております。

それで、今日は、一般に教養と称されている面にしぼって、一般人間を高めていく上に必要な教養とは、どういうものかということ、看護協会総会のため、静岡に来た記念として、静岡大学の岡部、三枝先生にお伺いしたいと存じているわけでございます。

お願い致します。

<教養とは全人間的なものへの回復である>

岡部 結局、教養というのは、全人間的なものの回復ということを目指しているんじゃないかと思います。学問が進化してきている。

たとえば医学でも進化してきている。そうすると、それを追っかけていくと、その他の領域というものにはもう手がとどかないということになるんで、どうしても全人間的なものという点から考える必要があるんじゃないかと思う。その点で、教養というものがどういう意義を持つかということ、私個人として考えると、一つは、たとえば医学の発展の可能性をもっと高める作用を教養というものが果たしていく、それからもう一つは、医学発展というようなことを直接目指してはいないけれども、直接医学に役立たないかもしれないが、しかし一般的に人間として、高いと言うか、豊かなものを感じさせる、そういう二つの面があると思う。だから、問題は、教養というものを専門の支えにする面



岡部先生

三枝先生

を強調して考えるか、あるいは専門を切り離して、一般的に言う人間的なもので考えるかということに分かれると思うんですがね。専門教育、特に医学関係で言うと、前者の意味においての教養というものはずい分役に立つのではないかと思う。

三枝 大学における一般教養については、たとえば理科系統の人は文科をやり、文科系の人は理科をやるということで、一般教養というものが戦後において重視されてきたでしょう。しかし最近の東大なんかの傾向を見ますと、一般教養にずい分時間を食われる、それじゃ専門の高い水準の学問を習得し切れない、たとえば医学をやる人にとっては科学一般、そういう意味の一般教養の方は重要だけれども、文学とか哲学というものはむしろやめた方がいいという空気が強いらしい。

岡部 つまり僕の言った第1の意味の教養が重視されて、第2の、遠いところではつながるんだけど、直接にはつながらない、そっちの方の教養を捨てようとする傾向がある。これは一般的な傾向ですね。

三枝 それが看護婦さんの場合にはちょうどそれとは逆ですね。

司会 逆という所まで行くかどうか。ただ今までは技術教育だったわけですね。それでむしろ正しい判断力というようなものが失われていく可能性があるということ、病院の機能が拡大してきてチーム・ワークというものが大切になってきますと、リーダーも必要とされ、その場合相当高い教養者でないと仕事が能率的にいかないから、ということでしょうね。

＜人間を扱う職業人として＞

三枝 高等看護学校の校長さんがこんなことを言われていました。これは極端に誇張していったことだと思うんですが、看護婦さんが患者さんに対して非常に事務的だ、人間を扱うんだから、もう少し扱いがあると思うのに、そういう感じを抱かせるのがある、あれは困る、直せというわけです。私に小説を読ませろというんです。で、そういうところから大体御要求の意図はつかめるわけです。

岡部 大学なんかは戦後一般教養ということを重視した。これは占領政策であったけれども、専門教育がおろそかにされるということで、さっき言った第1の方の教養に少ししほろうとしているわけです。しかし専門学校——これは戦後なくなったわけだが、専門学校、そういうものからいうと、逆に第2の方の、つまり直接専門に関係のない面の方をもう少し強調しなければならぬという傾向が出てきている。

司会 先生のおっしゃった全人間的なものの回復という言葉がびんと来たのですけれど。社会が非常に分業化され、それぞれが高度な専門職業として発展していくと

き、片寄った感じの人たちがたくさん出てくる傾向はありますね。たとえば一般的な問題あるいは政治的な問題あるいは社会全体をよくしていこうといった問題に関心を示さないという感じの人が多くなっているというよう

三枝 無関心の人が多いわけです。

岡部 さっき言った第1の方の教養ももちろん大事だが、直接問題になっているのは第2の方だと思う。それで第2の場合にどういうものをやるかということが問題だ。ごく一般的に言えば文科の人は理科をやり、理科の人は文科をやる、これは全人間的なものの回復ということにつながってくると思う。

それで看護関係で言えば、どっちかと言うとこれは理科系だから、文科系のものになる。哲学とか文学というものの方が大事だと思うんです。それはつまり、哲学とか心理学とかあるいは文学というものはやっぱり全人間的なものを狙っている。そういう意味でどうしても中心的な科目になりはしないかと思うんです。

三枝 年齢から言いまして、高等学校を出てから3カ年ですから、人間的にめざめているし、いろんな経験をする。文学なんか別にそういう時間がなくとも読むでしょう。そこにそういうのが教科としてあれば非常に興味を持ちますね。カリキュラムの大半が化学的なものでしょう。若干励みになるかもしれませんがね。

司会 学生自身が今言っておりますことは、われわれは今人間形成の時代だということです。これはご存じないかもしれませんが、臨床実習というものがあまして、現場に出て行って実習するわけです。看護婦さんの場合に自分の自由になる時間が非常に少ないわけです。本なんか読む時間がない。人間形成そのものができないと言います。もっと自由な時間がほしいということを学生は強く希望しています。

岡部 極端に言うと、時間を与えるということも一つの教養科目になるかもしれない。(笑声)

＜ナイチンゲール精神のとらえ方＞

司会 学生は、ナイチンゲール精神の受け取り方についても非常に批判を持っておりますね。

岡部 ナイチンゲール精神というものも、純奉仕的なもの、滅私奉公につながる、そういう形で言われているけれども、ナイチンゲール自身がいた時代、そういう歴史的背景を持った時代においてはやっぱりりっぱな意義を持っていたと思うんです。だからそれを歴史というものの時点を異にする今日、固定した形で押しつけるということは問題ですね。ですから、経営者が、たとえば低賃金で働かせる、あるいは文句を言わせないで唯々諾々としてやらせるという方向で、つまり一種の政策としてナイチンゲール精神を唱えていくんじゃないか、そ

編集デスク <11>

川端康成に「末期の眼」というエッセイがある。およそ川端康成論が書かれる際に、誰でもとりあげざるを得ない凄絶な文である。川端自身は、自分が語られる際に、いつでも「末期の眼」が引き合いに出されるのはいやだと言っているが、論者にとっては、川端康成を論ずる場合に、川端の本質をとらえ、それを語るに、この文を逸することはできないから、川端が好もうが、嫌おうが、おかまいなしに、引用せざるを得ない文である。

孤児として人となった川端は芸術家の血は病み弱められており、消えゆく残燭が、いまわの際に燃え上がったのが芸術家の生命だと信ずることを述べている。これはすでに悲劇であり、芸術家は一代にしてできるものではないことを語っている。川

端康成という、亜流を許さぬ芸術家も、そのようにして生み出されたものであろう。康成はもの心つく前に父母を失い、一人の姉をも早く失い、祖母を失い、祖父の手で育てられた。そのような天涯の孤児の感情が、川端文学の本質には流れている。それは、すでに亜流というものの存在を許さぬ環境である。

川端康成の目

長谷川 泉

康成の眼は、異様にぎょろりとして輝いている。無口であって、自からは語ることをしない。私が始めて康成に会ったのは、鎌倉の居宅であった。当時私は一高の生徒で白井健三郎や今は亡い松本彦良（東北大学教授）と共に訪れた。文芸部の委員として、この怖い先輩を訪問したのであったが、みずからは語りかけるこ

とをせず、私たちの語るのが聞いて、間に短言をはさむだけで、あとは終始無言、例の凝然たる瞳を据えてぎょろりと睨まれるのには閉口した。その眼光は、すべての外相を剝脱して、内奥を見透す光である。川端文学の神髄につらなる眼である。「末期の眼」のきびしさである。この恐るべき対面の雰囲気とを和らげてくれるものがあるとすれば、康成がいつくしんでいる小鳥たちの声だけであった。名作「禽獣」の世界である。そんなことを思い出しながら、私は「川端康成入門」（講談社版「現代日本文学全集」）を書いた。その文に接した人に、永久に忘れ得ない強烈な印象を与える文は、そう多くはない。「末期の眼」はそのような文である。そして、私もまた川端康成を語るのに「末期の眼」を逸することは不可能であった。

ういうことで批判が出てきているとしたら、これはもっともだと思うんですよ。だからナイチンゲール精神そのものを歴史というものの動きに即して考え直すことが必要だと思う。そうしてそうなったときに、そういうものを一つの職業倫理と言いますか、そういう観点から再編成するということが要求されているんじゃないんですか。これは昔の師範学校もそうです。固定したものに押しつけようとする。非常に便利だけれども、歴史の動きに即しないという面が出てきます。そうすると新しい指導理念というものが見つからないから、指導者の側もあるいは指導される側もとまどうということになってくるし、あるいはそれをただ利用しようとする、そういう面の弊害が出てくると思うんです。

三枝 いわゆるナイチンゲール誓詞なるものが教育勅語みたいになっちゃっているとすれば、そこに問題があるんじゃないですか。形式化されている。そうするとかえって内面のものを失っちゃうことになるわけです。

岡部 奉仕の精神というものは大切だと思うんです。しかし同時に、それが低賃金でいい、あるいは肉体的な過労でかまわない、オーバー・ワークでかまわない、それと同意義じゃ遺憾だと思う。やっぱり人間として肉体的・精神的にゆとりがあると同時に、それがあつた上で、しかもなお奉仕の精神というものが考えられるわけなんです。それが簡単に言えば、新しいナイチン

ゲール精神になると思います。

<成長の時期によい肥料を>

司会 大学の場合と看護学校の場合とは違うんですが、個人が人間的に進歩あるいは成長を遂げようとするときに、先生の立場として、どのように援助なさっていらっしゃいますか。

岡部 これはその人自身が自分で成長する力を持っているということが前提条件になる。ちょうど作物なんかにある時期に肥料をある分量やったときに非常に成長する。それと同様に成長する時期に適当な分量の肥料をやるというようなことぐらいしかできないんじゃないですか、教師は。

三枝 僕は実際には商船大学の一般教養の文学をやっていました。それから現在静岡薬科大学の一般教養の文学、それから高等看護学校の一般教養をやっているわけです。みんな文科系じゃない。いずれも出たら何になるかということとははっきりしているわけです。それで私としては、船乗りさんのことも、薬のことも、また化学方程式もわからないわけです。（笑声）それでそういうことでは学生と何も直接関係はないわけですが講義する場合、文学について専門的な話をしても受け取る側にとって興味がないということはあるわけですね。ですからおもしろく話すことを求めるわけです。というのは商船大学なんかは男ばかりであり、看護学校の場合は女ばかり

りである。そこでは興味のあるなしを非常に露骨に出しますね。出席なんかに関係するわけです。それで文学というのは、小説なんか直接人間味が出てくるわけですから、人間像というものを明確に論じていく、あるいはそれに即して話を進めるということですね。

司会 生徒に影響するものは結局先生自体の豊富さというものです。

三枝 先生が教材から何を引き出して何を与えるかということです。だからたとえば文学の教材ですと、恋愛とか人間と人間との戦いとかという素材が非常に多いわけですね。

岡部 教師として言うのと、たとえば大学の教師だったら文学を通して、数学の教師だったら数学を通して援助する面と、それからもう一つ、それに触発されて人間性なら人間性というものを自分で考え直していくとか、つかんでいく、あるいは先生は直接語られないけれども、先生の生き方なり考え方なりをつかんでくる、この二つあるような気がします。で、その生先が非常に望ましい先生であるならばその二つをうまく栄養として生徒に与え得ると思うんだな。

＜良い先生とは＞

司会 岡部先生が“いい先生は”という先生としての資質のようなことをちょっとおっしゃいましたが、もう少しいい先生というものの要素を説明していただけないか。

岡部 僕は今言ったぐらいのところから出ないんですが、一つは教える科目について生徒の興味や関心に即して話をする、しかしそれが学問的にもしっかりしたものでありたいというふうに考えるわけです。学問的に幾らりっぱであっても、生徒の興味や関心に応じないものはだめだ。そういうものをキャッチするのがいい先生だと思う。もう一つは、私は、今の道德教育というのはあまり好きじゃない。それが人間形成にとってどれほど役に立つかわからない。しかし前の要素を、前のことをやりながら、生徒の興味や関心に即して、そうして学問的にしっかりしたものを教えながら、しかもその先生の生き方なり、考え方なりがその背後に隠されているもの、あるいは基礎になっているものが自然と伝わる、そうした先生が僕は一番すばらしい先生だと思う。

司会 私、岡部先生から国文を習ったわけなんですけれども、今になっても不思議に思い出すのは、雑談なんです。背景的なものをみようとか、あるいは歴史的なものをみようとする場合に、その見方とか考え方というものを雑談の中から受け取ったという印象が強いわけですね。

岡部 学科というものと雑談というものとを一応切り離して印象を受けたというのはまずかったかもしれない。学科を教える中に雑談が非常に自然に吸収されていかな

ければほんとうの教師になっていないんじゃないか。

三枝 雑談が魅力ということも必要だと思うんです。

司会 そのときの事象をとらえて教師がいかにかそれを解釈しているかということが非常に影響力があるんじゃないかと思う。

岡部 教師の考え方がなまだと、変な影響を与えるんで、今から考えるとおはずかしいのですが、しかしなまのものでも、なまのものだということが聞く側にわかってくる時期があれば教育として大成功だと言えますね。

＜看護婦学校の読書レベル＞

三枝 僕は、高等看護学校の読書調査をやったわけです。それからさっそく他の大学の読書調査もやったわけです。何を読んだいるかと言いますと、薬科大学なんかのレベルは相当高いわけですね。たとえば、「キュリー夫人伝」「フレミングの生涯」、あるいは「ジャン・クリストフ」とか、必ず読むべきだと思うようなものを読んでいるわけです。そういうものが看護学校の生徒から出てきてもいいわけですが、実際にはその結果は、新聞小説や何かの、たとえば、「皇女和宮」、石坂洋次郎の小説とか、そういうものが多い。もちろんそれだけじゃないわけですが、全体の水準から言うと、高いとは言えないわけです。だからそういうことからして、それらを上げるのにはどうしたらいいか、手をとって、低いものを少しずつ上げていくという方法と、一流のものを与えてやっていく方法といろいろあるわけです。そういうふうな手順を単なる学問的なことじゃなく、雑談などを通してやっていかないと結果においては上がっていかないとことです。

＜現代の教養書＞

司会 教養書というようなものは、時代とともに変わっていくものだと思いますが、たとえば、私たちの時代の教養書というものは、「幸福論」「愛と認識との出発」「善の研究」というようなものがすべての学生の読書の中に入っていました。現代の教養書というものをいかなるところに求めたらいいの。

岡部 倉田百三の「愛と認識との出発」、阿部次郎の「三太郎の日記」なんか相変わらず読まれているようですが、僕は19世紀の小説なんか欠くことができないと思う。

三枝 トルストイ、ドストエフスキイ、もっと新しいところでアンドレ・ジイド、そういう、つまり思想のある文学書、小説ですね。

岡部 さっき出てきたジャン・クリストフですが、こういうものが影響性があるそうです。

司会 一方そういう長篇は、最近なかなか読まなくなっている傾向があるようですが、一般的に、新書版とか

あるいはダイジェスト的なものに興味があって、そういう長篇に取り組むということが若干今の若い人々に欠けているのではないかと思うんですが、その点はどうですか。

岡部 大学に入っている者が比較的よく読んでいるということがありますが、高等学校の場合は案外読んでいないわけです。結局ダイジェスト版であるとか、あるいは映画だとか、そういうもので安直に済ましていくという面もあるわけです。ですけれども、やり方によっては、そういうものから現物そのものに接するという機会も与えられるので、今そういうもので間に合っている傾向があるが、そうなくなってしまったというのではなくて、いずれは読む方向も出てくると思うんです。

三枝 高等学校でそういうものを読みたいという欲求があるのに、それを妨げるのは受験ですね。これは非常に強いです。高等学校が犠牲になるわけです。で、受験勉強のために読めませんでしたということは言いますね。

岡部 今の読める時期あるいは読みたい時期に受験勉強だけをしなければならぬということは相当響いていますね。

三枝 最近のベストセラーの傾向は、たとえば、2、3年前までは「愛情はふる星のごとく」といったように、愛情とか悲劇的なものがベストセラーの条件になっていた。最近では「頭のよくなる本」とかあるいは「記憶術」だとかそういう向心性、日に向かう方向にあって、陰惨なものはだんだん少なくなってきたということは言えると思いますね。そういう教養というものがあるわけですが、実際に。戦前の「三太郎の日記」の教養と最近の教養とはイコールなのか、同じなのはどこか、違うとすればどこが違うのか……。

岡部 一面から言うと、教養的ではないものが教養とされているとも言えるし、一方から言うと、教養というものが、何か教養のともすれば陥りがちな飾り、アクセサリーを脱却して実際的なものになった、あるいは地について来たとも言える。

三枝 地についているということは最近の傾向については言えるわけですね。

岡部 ただ気をつけなければならないのは、実用的であるために教養でないという可能性はあるわけです。

<教養を高めるために>

司会 最後に教養を高める方法論に少し入りたいわけですね。

三枝 結局自分の力というか、内面的な思索力、精神力というものをきたえるような本、これは本に限りませんが、そういうものですね。

岡部 一方で大書を読んでみるということもけっこうだと思うんですが、しかし一方で文庫本などが手軽で安

値だと軽蔑する向きがあるが、しかしいいものもずいぶんあるわけです。たとえば、最近でも佐々木の「風土病と闘う人」、これは岩波新書にあります。あるいは宮地伝三郎の「アユの話」、こういうのを読むと感激しますね。新書版は安直だというようなことを言いますが、そうじゃないんじゃないか。しかし一方そういうものだけで済ますということも考えられないわけです。ですから新書版みたいなもの、そういうものの中からセレクトしていくということと、それから大書に取り組むということ、両方やっていく必要があるんじゃないか。

何にしても、教養というものは結局一生の問題であるから、一時ある時期だけでやるもんじゃないということが、ほんとうにわかっていくということが大切なんじゃないか。つまり、35時間やったからそれで教養が身についたという考えを持つほど教養に反することはない。35時間を一つのきっかけとして、一生そういうものを読んでいったり、あるいは考えていったりする、そういう態

教育用語解説<14>

◇教育評価◇

教育評価 (evaluation, appraisal) とは、毎日の教育のしごとが、果して目標とするところまで到達したかどうかを絶えず判定して、明日の指導への反省とするとともに、その役割がある。J. W. Wrightstone によれば、「評価とは、従来のテストや試験で考えられたよりも、より包括的な測定概念を導入しようとした、比較的新しい学術用語である。測定と評価の差異は、前者では教科の学力や特定の技能・能力のひとつひとつの面に重点がおかれているのに反し、後者では、広義の人格の発達や教育計画の主要目標に重点がおかれていることにある。したがって、評価は、教科の学力のみに限らず、態度、興味、理想、作業態度ならびに個人的社会的順応性をも包含するものである」(Encyclopedia of Edrs. Research, 1950) といっている。また、小見山栄一氏は、さらに具体的に、教育評価の目的に関して、◎指導の資料を得るため——(1) 児童生徒が指導目標に到達したかどうかを知るため、(2) 児童生徒の個人的差異を明らかにするため、(3) 学習者に自己の進歩の度合を知らせるため、(4) 学習を動機づけるため、(5) 児童生徒の全般的傾向を知るため、(6) 児童生徒の環境や背景を明らかにするため◎教師の反省のため——(1) 教育活動の基いた原理の妥当性を検討するため、(2) 教育課程、教授法、教科書等の評定のため、(3) 教師が研究の資料を得るため、◎教育の管理のため——(1) 教育の能率を確認し、改善に必要な点を指示するため、(2) 社会生活を営むに必要な教育の水準を維持するため、(3) 地域社会の協力を求める資料を得るため」と述べている(「教育評価と測定、金子書房 1953」)。

〔参考文献〕

- 1 橋本重治「教育評価法総説」金子書房、1958
- 2 樋口伸吾「教育評価」共立出版、1959
- 3 現代教育心理学大系 9・10、中山書店、1958 (高倉 翔)

度あるいは気持ちというものをそこから得るということがほんとうの教養じゃないかというふうに思うんです。

＜学生運動などに対する先生の態度＞

司会 同じような意味で行動という問題に入っていくと思います。たとえば、学生運動とか、政治的活動あるいはサークル活動などについて。

岡部 学生の行動については、たとえば僕の場合は1年間厚生補導委員長というものをやりまして、その衝に当たったので特になまなまいわけなんです、進歩的な先生の立場に立ちますと、どうかすると学生の行動をそのまま認めようとする傾きがあるわけです。そうして、そういうものを通してほんとうの教養というものが身につくんだ、本を読んだり見たりするだけじゃだめなんだということでそのまま認めようとする傾向があるわけです。保守的な先生は、高等学校と同じように、学生というものは、肉体的には大人だけでも、まだ精神的には未成年だ、という考え方からともすれば押えようという傾向にある。その二つの傾向があってその取り扱いに困ったわけです。それで私なんかで言うと、第1の、つまり学生の行動を大人として認めよう、こういう立場に立つわけですが、大人と言っても、大人にもいろんな段階があって、学生と大人という対立概念じゃないわけです。大人だって、学生以下の者もいれば学生と同じ者だっている。また学生よりもすぐれた、進んだ者もいるわけです。ですから現状としてはもう大人の仲間です。たとえば看護学校の生徒だって認めたいと思うんです。しかし一方、教養というものの一つの目的は、つまり自分の考えている通り人が考えているものではない、自分が感じている通り人が感じているのではない。そういうゆとりを持たなければならぬ。エンゲルスかだれか言いましたが、ほんとうの教養というものは、つまり自分の階級的な立場を離れて考えること、大部分の教養のない人は、

自分の立っている階級というものの利害得失というものから離れられない、だから自分と違った階級の人の考えていることがわからないわけです。それがわかるのがほんとうの教養だということです。教養というものは究極はそういうところにあるんじゃないかと思うんです。そういうことから考えると、これは学生だからということじゃなくて、あるいは教師だからということではなくて、自分がある行動をいたしますね、そのときにその行動がやっぱり全面的に正しいのではないんだということです。つまり違った人は違った行動をとるんだ、そういうことを考える余裕が必要じゃないかというふうに思って、学生運動なんか、一緒になって動いてきましたけれどもね。

＜(組織)と(個人)の理解の上で＞

三枝 大学の場合に昔と違うのは、組織があるということでしょう。学生には全学連というような組織がある。必ずしもそうじゃなく、サークルとか、そういうものの行き方というものを先生よりも知っているわけです。それで先生は孤立した人格というものに即して教養とか何かを考えるわけです。組織とかサークルというものに対して全然理解がないということです。これは教育者としてはちょっと不見識じゃないか。そういう人間関係をどう正しく育てていくかということをつかむ必要があると思うんです。

岡部 自分だけを頼りにして、孤立した人間として教養を考え、孤立した人間としての教養を与えようとし、そういうものを十分見ていないという面で教養を与えるはずの先生自身もすでに根本的な教養が欠ける面があるということになるわけですね。

司会 お聞きしたいことは、いろいろありますがこの辺で。大変ありがとうございました。静岡に来ました記念として、いいお話を伺うことができて感謝致しております。

《次号予告》

ゲラフ	改善されて行く看護用具……………	日赤中央看護研究会
—guide for teachers—		
	結核看護法をこう教えている……………	八板作子
	外科看護法の指導について……………	国分あい
	保健所実習をどう行ったらよいか……………	浅野花子
	病床不満の子供 小児科看護の一つの問題……………	小嶋謙四郎
教育の基礎	看護教育面における討議法の役割……………	佐藤恒信
研究	病院における公衆衛生活動……………	大隅淳子
	学生の全寮制について……………	長井芳子
座談会	☆高校教育を受けつぐ看護教育の指導をめぐる……………	長尾十三二・他
看護管理講座	4リーダーの仕事……………	小林肇
教材	日本近代女性史(4)……………	福地重孝
＜2巻・10号＞		